

人と動物をめぐる地理学の役割

著者	池谷 和信
雑誌名	人文地理
巻	61
号	5
ページ	55-56
発行年	2009-10-28
URL	http://hdl.handle.net/10502/4589

[フォーラム：人と動物をめぐる地理学・地域研究の現在]

人と動物をめぐる地理学の役割

池谷和信

I 21世紀、様々な分野で類似化する研究

近年、日本各地で農作物に対する獣害がとりざたされる一方で、トキやコウノトリなどの稀少動物の保護に関しても活発な論議が行われている。日本列島という限られた空間のなかで、私たちが、どのように動物と共存したらよいか、きわめて重要な課題になってきている。

しかしながら、野生動物に限定しても、人と動物との関係は多様である。例えば、イノシシのような動物では獣害が生じており、コクジラのような動物は稀少動物になっている。その一方で、これらの動物ごと地域ごとに異なる生息の実態、およびそれらの違いを生み出す原因も十分に明らかにされていない。本例会では、イノシシ、クジラ、ラクダなどの動物に焦点を当てて、現代における動物と人のかかわり方の特徴を、国内のみならず地球環境論的視野から把握することをねらいとした。

まず、今回の3つの個別報告は、生物地理学(高橋氏)、文化人類学(岸上氏)、生態人類学・社会生態学(縄田氏)というように、報告者が中心にするアプローチは異なるものの、人と動物とのかかわり方を把握している点では共通している。具体的には、人・動物関係を把握するための枠組みとして、高橋氏のように動物の側から人を見るか、岸上氏および縄田氏のように人の側から動物を見るかで二分される。しかも、岸上氏がイヌビアククのホッキョククジラ観という文化の側面に焦点を当てるのに対して、縄田氏は自然資源に深く関与するヒトコブラクダの飼育と資源利用という生存活動に言及している点で対照的である。

さて、このように人と動物とのかかわりの研究は、地理学や文化人類学以外にも、畜産学、獣医学、生態学、社会学、歴史学、ヒトと動物の関係学(池谷2009)など、多彩な分野で行われており、各分野それぞれの視点が提示されてきた。しかし、このテーマを

めぐって人文地理学の中での論議は、日本地理学会のネイチャー・アンド・ソサエティの研究グループを除いて、これまであまり活発ではなかった。今回の例会では、隣接分野の研究者の協力を得て、これまで試みられてきた多様なアプローチの一部を統合する機会になっている。ここでは、①人・動物関係をめぐる対象動物、②村、国、大陸などの空間スケールによって異なる人・動物関係の地域性、③時間スケールごとに変わる関係性の歴史的变化という3つの視点から論述する。

II 森、海、砂漠と人・動物関係

(1)対象動物 動物は、野生動物、家畜、ペットの3つに分かれるが、イノシシやクジラは野生動物、ラクダは家畜であり、今回、ペットは扱われていない。それに伴い、前二者では動物利用と動物保護とのかかわり方が共通の論点になっている。2人の報告から、日本のイノシシではイノシシの保護政策はみられないが、狩猟者人口の減少などイノシシへの狩猟圧が小さくなり、獲物の数が増加して獣害をもたらしたとされる。

そのなかで、イノシシの肉を販売するための商業的狩猟も行われている。一方、アラスカのクジラでは絶滅が危惧されており、国際捕鯨委員会(IWC)の捕獲頭数制限のなかで先住民が生存するための狩猟が行われている。しかし、ラクダの場合、野生のヒトコブラクダはすでに絶滅しており、フトコブラクダの野生種は絶滅の危機に陥っているために保護の対象になっている。

ここでは、動物・人・社会という3つの相互作用というなかで、問題を掘り下げることの難しさを指摘できる。イノシシやクジラの資源量・生息数を把握することがかなり困難であること、人の動物への働きかけをどのように数量化したらよいかなど、未解決な仮題が残されている。この点では、ヒトコブラクダによ

る沿岸のマングローブ林への人為的作用に関しても同様である。しかしながら、3つの報告は、狩猟や牧畜などの自然依存型といわれる生業を対象にする場合、これらをアプリアリに自然と調和した生業であると仮定することに危険が潜むことを警告している。

(2)空間スケール 地表に生起する現象を地理学の視点から捉える場合、グローバル、リージョナル、ローカルという3つの空間ユニットを設定して、それぞれの空間でものを考えることが基本になっている。高橋報告では、日本の里山とイノシシというリージョナルな問題に焦点が当てられているが、広くアジアでは世界ではどうかという問題意識が挙げられる。また、国内でも集落によっては猟師の活動が活発であったりして、獣害が多くない地域も認められる。よりローカルな研究を蓄積することから、獣害の地域性を発見する必要があると考えられる。岸上報告はローカルな問題に焦点を当てており、今後、アメリカやカナダの海から世界の海に研究が展開していくことが期待される。その際には、アメリカやカナダに加えて、ロシアや日本という国家形態の違いが、人・クジラ関係のあり方に密接に関与することになるであろう。また、クジラの文化的側面に加えて、各地における人びとの経済活動のなかでクジラ猟の位置づけを明らかにすることが不可欠になろう。さらに、縄田報告では、ラクダによる紅海沿岸域での活動というローカルな問題に焦点を集めているが、今後スーダンからインドまでの内陸・沿岸の乾燥地域のなかでの地域特性を把握することも必要であろう。

(3)時間スケール 人の動物とのかかわり方は、1万年以上の人類史、数百年の古代から近世、100年以内の近現代という3つの時間スケールによって異なってくる。今回の3つの報告は、近現代や現在が扱う対象の中心であり、何らかの理由によって、人・動物関係の変容が共通して生じていることが指摘されている。ここでは、近現代には両者の関係に関与する変容は、あまり生じてこなかったという前提に立っているが、この見解は疑わしい。

その一方で、現在の地球レベルで進んでいる温暖化という共通の枠組みの中で、かつての多雪地域(北陸地方)へのイノシシの北上、北極海の氷の溶け方とホ

ッキョククジラの回遊ルートの変化など、環境問題への対応を共通の論点にすることができる。ラクダの場合は、直接に地球温暖化の影響を受けていると言及できないが、温暖化と関与すると思われる干魃などの影響を強く受けてきた。

以上のことは、それぞれの動物に対して空間スケールと時間スケールを十分に考慮して、人と動物とのかかわり方を把握することがいかに重要であるのかを示唆している。

III 地理学から地域研究へ

以上のように、人と動物とのかかわり方の研究は、現時点においても十分に体系化された方法論が確立されているわけではない。「学際的アプローチ」という名のもとに、異なる分野の研究を束ねながら試行錯誤が繰り返されてきたとあってよいであろう(池谷・林編2008)。

ここで、すでに確立されつつある人と動物との関係学のなかで、地理学の役割について考えてみよう。まず、今回の3つの報告の対象地域は、地球のなかでの冷寒帯(岸上報告)、温帯(高橋報告)、熱帯地域(縄田報告)に対応しており、地球環境全体をほぼ覆っている点が特徴的である。つまり、地理学は地球の全表面が対象であり、地球環境のなかで今回報告された3つの地域を選定した意義付けを相対化して述べることができる。また、今回のテーマの場合には、地理学のみのアプローチでは課題を十分に明らかにできず、隣接分野の研究の協力が必要であることがわかる。今回のような3者の報告は、生物の生態、人の生態、人の文化という側面をそれぞれ提示しており、それぞれが優れた研究内容を有している。しかし、人と動物との新たな関係を研究しようとする際には、3つの側面を統合することが不可欠であり、各分野の研究領域から越境をおかして「地域研究」という新たな地平に出ることが改めて重要であることを認識させられる。

(国立民族学博物館・総合研究大学院大学)

*参考文献

- 池谷和信「狩猟採集民の動物観」ヒトと動物の関係学会誌23, 2009, 27-33頁。
池谷和信・林良博編『ヒトと動物の関係学4 野生と環境』岩波書店, 2008。